様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１２２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７３０８２３

研究課題名（和文）文章表現における児童生徒の相手意識とコミュニケーション方略に関する研究

研究課題名（英文）Audience awareness and communication strategies in school children's wiring

研究代表者
森田　香緒里（MORITA, Kaori）

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：２０３３４０２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、児童が文章表現を行う際、相手によってどのようなコミュニケーション方略を用いるかについて、日英で国際比較調査を行った。小学校低学年においては、日本人児童は相手に応じてトピックを変更させるという方略をとるのに対し、英国人児童は語句レベルでの補足情報の付加という方略をとることがわかった。
　また、こうしたコミュニケーション方略がどのような発達過程を示すのか、小学校児童作文の日英比較を行ったところ、日本人児童の方がより複雑な発達過程を経ること、また英国人児童に比べ多様なコミュニケーション方略を持ちうる可能性があることがわかった。

研究成果の概要（英文）：This study examined about communication strategies and audience awareness in children's wiring by international comparative research with Japan and UK. In this research, while Japanese children often changed the topic of their writing according to audience, British children added some information at word level for audience. The result of analysis children's writing from a developmental point of view showed that Japanese children had more complicated and various communication strategies than British children.

研究分野：国語科教育

キーワード：文章表現　相手意識　作文　コミュニケーション方略　国際比較　イギリス

１．研究開始当初の背景

(1)国内の作文指導実践及び研究において、相手（読み手）を設定することの有効性や、児童生徒に相手意識を持たせることの重要性を論じたものは多い。しかし、相手が設定されることで、児童生徒は実際に自らの相手意識をどのように言語表現と関連させ実現させようとしているのか？この点について解明した研究は、ほとんど行われていない。

(2)認知心理学においては、文章表現過程における読み手の役割について、その具体的な方略を扱ったものや、文章表現の対話性について検討した結果が多数発表されている。また言語学においても、相手の属性によって生じる言語行動の変化の諸相について、調査・報告が行われている。

しかし、相手意識の表出がどのような発達過程を経て変化するのかという点については、国内においてはまだ研究成果が乏しい。

(3)そこで本研究では、小学生～高校生段階を縦断する作文調査を行い、発達研究を行う。また、日本と英国の２国間で作文調査を行い、国際比較する。この発達的観点、及び国際的観点が、本研究の独自性である。

(4)研究代表者は、これまでに児童生徒の文章表現における相手意識に関する研究を継続している。その成果は以下の４点である。

①「書き分け課題」という、相手意識を文章表現中に生起させるための調査方法を提案した。これまでに日本の小学生～大学生、英国の小学生を対象に調査している。

②相手意識は、文章の表現形式と内容構成の両面に関連し表出していることを確認した。

③上記の関連・表出の仕方が、発達段階によって異なるという仮説を提示した。すなわち、小学校低学年段階においては、伝達したい内容の選択という点に相手意識が強く働くのに対し、高学年及び高校生段階においては、表現形式や情報配列といった点に働く、という仮説である。

④日英の小学生の作文データの比較から、相手意識の発動によってとられるコミュニケーション方略が、両国で以下のように異なることがわかった。英国人児童は、ジャンルが要求する文章構成を維持したまま、語レベルの工夫で配慮を示そうとする傾向が強いのに対し、日本人児童は、ジャンルを超えてでも文章内容を変化させて相手への配慮を示すという傾向が見られた。

(5)本研究では、再度英国での作文調査及び日英比較を行い、児童生徒の相手意識の実態と発達過程を解明することを試みる。

２．研究の目的

本研究は、文章表現に表れる児童生徒の相手意識とコミュニケーション方略との関連性について、発達的・国際的観点から解明することを目的とする。主たる方法としては、小学生から高校生までの児童生徒を対象に、日本と英国で作文調査を行い、得られたデータの分析を行う。相手を意識することによって、どのようなコミュニケーション方略がとられるのか。両者の関連性を明らかにするとともに、その発達過程を、国際比較を通して解明していく。研究の全体構想としては、相手意識の発達という観点からの作文教育カリキュラム開発を最終目的としており、本研究はその中で、相手意識の発達過程の解明という基礎的作業として位置づくものである。

３．研究の方法

本研究は、以下の方法によって行った。

(1)相手意識と作文指導に関する国内外の先行研究を収集し、相手意識が文章表現過程においてどのように機能するのか、またどのようなコミュニケーション方略と関連するのか等について検討を行った。

①主として、国内外の作文研究、認知心理学、日本語教育、社会言語学、社会心理学等の文献を収集し、相手意識と文章表現に関する研究状況を把握した。

②日本の国語教科書における作文単元を広く収集し、相手意識の設定についての実態を調査した。

(2)児童生徒を対象とした作文調査課題の検討を行った。過去の研究成果を見直し、調査方法及び調査課題の妥当性について、協力校の教諭らとともに協議した。作文調査では、これまでに提案してきた「書き分け課題」を今回も採用するが、児童にとって書きやすく、かつある程度必然性や現実性のある課題にしなければならない。この点を検討するために、調査前に協力校との協議が必要となった。

(3)日本の公立小学校において作文調査を行った。対象学年は、１～６学年である。なお、当初は中学校と高等学校での調査も予定していたが、協力校での実施形態や調査時期等で折り合いがつかず、やむなく小学校のみでの調査となった。

作文調査は、具体的には「夏休みの思い出」を、日本人と外国人という異なる二人の相手に向けて書き分けるというものである。

(4)英国での作文調査もあわせて行った。こちらも当初は、初等学校と中等学校での調査を予定していたが、日本での調査が小学校のみになったことを受けて、初等学校のみとした。また、こちらは協力校の都合により、低学年（6～7 歳児）のみの調査となった。

こちらの作文調査は、「夏休みの計画」を、英国人と日本人という異なる二人の相手に向けて書き分ける、という内容となった。

(5)得られた作文データを分析し、相手意識の表出の分析を行った。自らの経験や知識を相手に伝えようとする場合、どのようなコミ

ュニケーション方略をとるのかを、相手による違いをもとに抽出し、分析した。
(6)また、日本人児童対象の調査では「振り返りシート」を用意し、作文調査終了後に児童に記入してもらった。コミュニケーション方略がどの程度メタ認知されているかを調査するためである。
(7)得られた成果を学会誌に投稿し発表した。ただし、まだ全ての成果を発表するには至っておらず、準備中のものもある。
また、調査協力校を中心とする地元の教員研修等でも発表することで、成果を還元した。

４．研究成果

本研究の成果は、以下の５点である。
(1)相手意識が文章産出過程においてどのように機能するかを、認知心理学における「作文産出過程モデル」を援用して確認し、「文章産出過程における相手意識の機能モデル」を仮説的に提示した。従来の「作文産出過程モデル」では、「課題状況」における「作文課題」の一部として「読者」が位置づけられている。同時に「書き手の長期記憶」においても、「読者についての知識」ということで「読者」が位置づけられている。これら二つの異なる「読者」と、産出された文章との関連が明確になるよう、従来のモデルに「産出された文章」という項目を新設し、また各項目間の連関がわかるよう記号を付し、「文章産出過程における相手意識の機能モデル」を提示した。このモデルを使用することにより、相手意識に関する先行研究が複数の学問領域にわたっていても、何に焦点を当てたものかが整理できるようにした。
(2)国内外の作文指導、認知心理学、日本語教育、社会言語学、社会心理学等の領域において、相手意識と文章表現に関する研究成果を抽出し、検討を行った。その結果、以下のような研究状況にあることを整理し、③のような結論を得た。

①国語教育研究においては、書く意欲を高め、書く内容を持たせるための手立てとして「読み手」が設定されている。この点は、認知心理学の最近の研究成果からも（部分的にではあるが）裏付けられており、読み手が設定されることで題材や表現形式が定まったり豊かになったりする、という点が明らかになっている。

②一方、日本語教育や社会心理学等の先行研究からは、読み手と表現形式の具体的な対応関係が数多く指摘されている。「アコモデーション理論」や「ポライトネス理論」等は、対人配慮が、待遇表現などの具体的な言語選択とどのように結びつくかについて解明しようとしている。相手の属性のみならず、書き手との心的距離や場面による違いなどが要因となって、どのような言語表現が使い分けられるかに関する調査が行われている。

③しかし研究代表者が問題にしたいのは、学習者が文章表現を行う際の選択意識である。彼らは、相手が設定された場合に、何を「適切である」と判断して、どのようなコミュニケーション方略をとるのか、という点である。先行研究の多くは、学習者に対して外部から与えられた条件と言語表現の結果の対応関係を示しているに過ぎず、学習者の内部でどのような言語選択意識やコミュニケーション方略が働いたのかを問題にしているわけではない。「相手に応じたものを書こう」と学習者が意識した時、どのような言語選択やコミュニケーション方略と結びつくのかという、学習者側の「適切さ」の判断や選択意識が問題にされるべきである。

(3)教室状況において学習者が文章表現を行う際の、相手意識の重層性について検討した。日本の国語教科書における作文単元では「○○さんに向けて書こう」といった相手の設定が行われる。この場合学習者は、宛名としての相手を意識しつつも、実際にはその作文を読む可能性のある教師や級友をも意識して書くことになる。教室における文章表現には、このように「宛名としての読者」と「隠れた読者」が存在する。こうした重層性について、①過去の国語教科書の作文単元の変遷、②英国の作文研究の成果、③学習者の作文の実態、の３点から検討を行った。その結果、以下のような結論を得た。

①「宛名としての読者」が明示されるのは、小学校低中学年の単元に集中する。学年が上がるにつれて、設定される相手は架空の人物等の疎遠な相手となり、不特定多数の相手に向けて書く単元が大多数を占めるようになる。一方で「隠れた読者」は、学年を問わず一貫して存在することになる。

②英国の国語教育学者ブリトンは、「隠れた読者」の主たる者として教師を挙げている。つまり学習者は、書こうとしている事柄を既によく知る教師（隠れた読者）に向けて書くことになる。この点が教室状況で書く際に生じる読者の重層性であり、書くことの困難の一部は、こうした書き手と読み手との特殊な関係に起因している。

③学習者の作文の実態から、相手の重層性は、高学年の時点である程度認識されていることがわかった。また、「宛名としての読者」は、低学年においては書く事柄を決定する要因として機能しており、高学年においては情報配列や構成のモニタリングとして機能している。これらの点から、相手の重層性の問題は、書き手である学習者が実際にそれをどのように意識するかという問題として考えられるべきである。

(4)日本人児童（小学校 1～6 年生）と、英国人児童（6～7 歳児）を対象に作文調査を行い、国際比較・分析を行った。
まず、低学年児童の作文の日英比較を行い、以下のような結論を得た。

①英国人児童には、「夏休みの計画」を書

くことを課題とし、その学校の校長先生（母語熟達者）宛と、日本人女性（非母語話者）宛の２通りの文章を書いてもらうこととした。日本人児童には、「夏休みの思い出」を書くことを課題とし、研究代表者（母語熟達者）宛と外国人留学生（非母語話者）宛の、２通りの文章を書いてもらうこととした。これらの読み手の設定は、協力校と協議した上で、児童の書きやすさを優先して決定した。

②＜トピック（書く事柄）の選択＞

英国人児童の場合、相手がどちらであっても、トピックを変化させることはほとんどなく、両者に対しどちらも同一の内容を書いていた。一方日本人児童は、相手に応じてトピックそのものを変化させる傾向が強いことがわかった。

③＜表現形式における配慮＞

英国人児童は、非母語熟達者宛の文章に固有名詞を入れることを避ける傾向があり、入れる場合には「○○は島の名前です」といったように、補足情報を付加して配慮を示していた。これに対し日本人児童は、漢字使用に配慮が集中しており、漢字にルビをふる、ひらがなを使用する等の傾向が見られた。

④研究代表者のこれまでの研究成果では、小学校低学年の文章表現において、相手意識はトピックの選択に強く関わるという結論を得てきた。しかし、②③の結果から、トピック選択は日本人児童に特徴的に見られる傾向であり、英国人児童においてはそれほど有意に関連しない可能性が出てきた。この点については、追加調査を行い検証する必要があろう。

(5)研究代表者が過去に行った英国での調査結果と合わせ、日本人児童（小学校 1～6 年生）と英国人児童（6～7 歳児、10～11 歳児）の作文データを比較・分析した。小学校低学年と高学年の作文における、コミュニケーション方略の日英比較である。結果は以下の通りである。

①日本人児童の場合、相手意識はまずトピックの選択に関わっている。低学年では、相手によってトピックを変化させる例が顕著に見られる。相手によって書きたい事柄が変化している、あるいは相手が理解できる事柄を選択していると言える。

中学年になると、トピックレベルでの書き分けは大幅に減り、相手が異なっても同じ内容のものを書くようになる。一方で、漢字にルビをふる、ひらがな表記にするなどの、漢字に集中した語句レベルでの配慮を示すようになる。

高学年においても、非母語話者に対する漢字への配慮は引き続き見られる。加えて、語句の言い換えや補足情報の付加といった方略も増えてくるようになる。情報配列や構成レベルでの書き換えも、数は少ないものの見られるようになってくる。

②英国人児童の場合、6～7 歳児（低学年相当）においては、トピックレベルでの書き換えはほとんど行われず、伝わりにくいと思われる単語に補足情報を付加するといった、語句レベルでの配慮が多く見られる。10～11 歳児（高学年相当）になると、語句の言い換えが目立ち、選択可能な語彙から相手に応じたものを選ぼうとする意識が見られる。また、伝わりにくいと思われる描写や会話文などを削除し、全体の情報量を減らすという方略も顕著に見られた。

③これら①②の結果から、相手意識とコミュニケーション方略との関係における日英の発達段階の違いを仮説的に導出した。

日本人児童	英国人児童
トピックの選択 ↓ 文字・表記への配慮 ↓ 語句レベルでの選択 補足情報の付加 ↓ 情報配列･構成レベルでの配慮	語句レベルでの補足情報の追加 ↓ ↓ ↓ 語句レベルでの選択 描写や会話文などを削除し､情報を減らす

このように見ていくと、相手意識によるコミュニケーション方略の違いは、日英で異なる発達過程をたどることがわかる。日本人児童は、トピック選択に意識が向けられたのち、表記から語句、構成へと、より大きな言語情報の単位へとコミュニケーション方略が移行していく。また、英国人児童に比べ、方略も多い。

一方、英国人児童は、日本人児童ほど多くの方略はとらない傾向にあり、また、ジャンルを維持したまま情報の増減で相手への配慮を示す傾向にあると言える。こうした日英でのコミュニケーション方略の違いが生じる背景には、それぞれの作文教育の違いが大きく関わっていると考えられる。この点については、今後の課題である。

また、本研究の成果から、相手意識を持つことは、日本人児童にとってコミュニケーション方略を豊かに持つことにつながる可能性がある。今後、発達段階をふまえた作文カリキュラムを開発する上で、再検証していきたい。今回調査できなかった中学校および高等学校の作文データを加え、再度分析する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

①森田香緒里、文章表現における「相手意識」の所在―「相手意識」に関する先行研究の検討―、宇大国語論究、査読無、24 号、2013、1-12

②森田香緒里、文章表現における「相手（読

者)」の重層性について、月刊国語教育研究、査読無、495 号、2013、50-57
③森田香緒里、小学校につながる言葉の学び、国際幼児教育研究、査読無、22 号、2015、印刷中

〔学会発表〕(計１件)
①森田香緒里、文章表現における児童生徒の相手意識と言語調整行動―「相手意識」に関する先行研究の検討―、第 51 回人文科教育学会、2011 年 9 月 3 日、筑波大学附属中学校

６．研究組織
(1)研究代表者
森田　香緒里　(MORITA, Kaori)
宇都宮大学・教育学部・准教授
研究者番号：２０３３４０２１

(2)研究分担者
無し

(3)連携研究者
無し